



## 平成 30 年度 海洋水産資源開発事業 ＜いか釣：北太平洋海域＞の調査結果概要



調査船：第三十開洋丸(349トン)

調査期間：平成 30 年 4 月～9 月

調査海域：北太平洋海域

### 本調査の目的

アカイカ資源を効率的かつ有効に利用することを目的として、漁期の拡大および漁場の拡大の可能性について検討する。

### 本年度調査の主な成果等

平成 30 年 4 月には西経域で 30°N 以南の表面水温 20°C 付近の海域で調査を実施した結果、主に冬春生まれの産卵群が漁獲されたものの、まとまった漁獲とはならなかった。この原因として、一般に産卵期には捕食量が低下するため漁獲されにくいという生物学的な要因と、透明度の高い亜熱帯域で集魚灯を用いた従来漁法がそぐわないという技術的な要因が考えられた。

5 月は南方から亜寒帯前線に向けて北上しながら調査を実施した。4 月と比較すると漁獲は上向いたが、当業船並のまとまった漁獲には至らなかった。

6 月になると、170～180°W 付近の亜寒帯前線の直上もしくはその近傍に漁場が形成された。

7 月から 8 月にかけては東西に広く調査した結果、160～170°W 付近においても、東経海域もしくは日付変更線付近の従来の漁場の漁獲に匹敵する漁獲が得られ、相応の漁場形成の可能性が示唆された。漁獲されたものは、未熟雌からなる秋生まれ群が優占した。

8 月もこの群が成長しつつ引き続き漁獲の主体となったが、新たに冬春生まれの小型群の加入が始まっており、これらが漁獲を継続させた要因であると考えられた。なお、本漁場は数値シミュレーションから得られた結果と同様、亜寒帯前線域の北側に漁場が形成されていた。

9 月には日本近海で数回調査を実施したが、操業日数が十分でなく、まとまった漁獲は得られなかった。

以上のことから、現状の中型いか釣船は年間 1 航海(約 2 ヶ月)しか操業を実施していないが、本調査結果より、2 航海操業の実現も示唆された。今後は、例年日付変更線付近で漁場形成される秋生まれ群の漁場の広がりを確認するとともに、西経域で新たに確認された冬春生まれ群および日本近海において冬季に漁獲される冬春生まれ群の長期的な回遊の追跡による漁場形成機構の検討が主な課題としてあげられる。

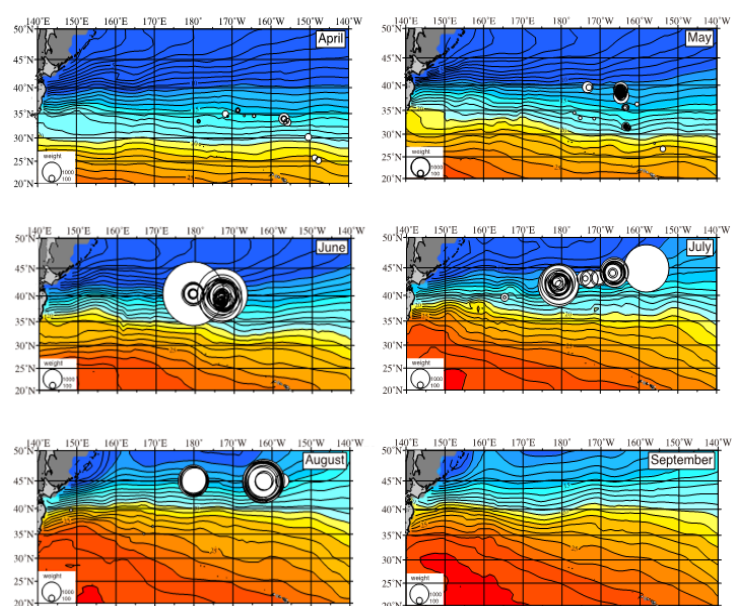


図 1 各月漁獲量(重量)と表面水温分布